

2024

2024 年度 第 24 回女子美制作・研究奨励賞 達成・進捗報告書



有村佳奈

Kana Arimura

Kana Arimura

有村 佳奈



Biography

1985 年 鹿児島県出身

2008 年 女子美術大学デザイン学科 卒業

2017 年からウサギの仮面をつけた女性をモチーフにした絵を中心に描き、『現代を生きる乙女の生と死』の表現に取り組んでいる。2023 年は女優／ソロシンガー・田村芽実との展覧会「未完成のエピローグ」(EARTH+GALLERY)を開催し、写真・デジタルコラージュ作品等新たな試みにも挑戦、また初のコレクション展 (Gallery&Cafe AQUA・+SPACE Gallery) が企画された。また今年 4 月に初のパリでの個展「Sakura」(Gallery Jo Ya) が開催され、海外での活動の場が広がっている。その他、装画『祝祭のハングマン』(著・中山 七里 | 文藝春秋)、装画『御伽の国のみくる』(著: モモコグミカンパニー | 河出書房新社) 等、本の装画のイラストレーションも行う。2024 年、女子美奨励賞受賞。

Solo Exhibition History

2025 年 個展「Real」(tagboat / 東京)

2024 年 個展「CHANGE」(tagboat / 東京)

2024 年 個展「Sakura」(Gallery Jo Yana / フランス・パリ)

2023 年 個展「キセキ」コレクション展 (Gallery&Cafe AQUA / 和歌山) | 巡回展 (+SPACE Gallery / 白浜)

2022 年 個展「Treasure-hunt~# 宝物を探して ~」(The Artcomplex Center of Tokyo)

2022 年 個展「I' m ready」(tagboat / 阪急メンズ東京)

2021 年 個展「Color Girls」(CLOUDS ART+COFFEE / 東京)

2020 年 個展「新宿ミロード × 有村佳奈アート展」(新宿ミロード)

2020 年 個展「Welcome to Daydream —ようこそ、白昼夢へ—」(The Artcomplex Center of Tokyo)

2018 年 個展「Fantasy は眠らない」(The Artcomplex Center of Tokyo)

2017 年 個展「きっといつか夢から醒めてしまうね。」(The Artcomplex Center of Tokyo)

Group SHOW History

2025 年 tagboat ART fair 2025 (東京 / 浜松町)

2024 年 「つなぐー TSUNAGU ー」(外環塔 Vaikuntha 藝術中心 / 台北)

2024 年 tagboat ART SHOW (tagboat / 大丸東京)

2023 年 第6回 京都 × アートプロジェクト (京の家 七条塗師屋町)

2023 年 2 人展「未完成のエピローグー有村佳奈・田村芽実の実験室 ー」(EARTH+GALLERY / 東京)

2023 年 脑洞里的艺术馆2023 (333gallery / 台湾)

2023 年 tagboat ART fair 2024 (東京 / 浜松町)

2022 年 Art Fair HAKATA tagboat HAKATA HANKYU (福岡)

2022 年 和心芸術祭 (Gallery Jo Yana / フランス)

2022 年 Art Fair GINZA (銀座三越)

2021 年 カモフラージュ展 (MASATAKA CONTEMPORARY / 東京)

2021 年 タグボートアートショウ (阪急メンズ東京)

etc.....

✉ info@kana-arimura.com

📷 @kana_arimura

✂ @arimu7

制作・研究の動機・目的

CONCEPT

現在「ウサギの仮面をつけた女性をモチーフにした絵を中心に描き、『現代を生きる乙女の生と死』の表現」は継続的に描き続けている。常に新たなテーマを設けて制作している。主に取り組んでいる制作方法は、キャンバスにアクリル絵の具で描く手法である。

Motive/purpose

「作品世界の幅を広げるため」「多くの人に見てもらう機会を増やすため」「アートに興味を測った人に知ってもらうきっかけを作るため」以上3点の目的のため、制作し、展示・発表を展開している。

01.展示

定期的に作品を発表する場を作り、作品の精度を上げていくと同時に、年代や世の中の時勢によって、その客足や売上も大きく変わってくるため、現在の社会のトレンドをキャッチした作品を発表。新しいアイデアにチャレンジしつつ、自分の作品世界を深めていく。

02.SNS対策・自己プロデュース

作品制作の探究と同時に、活躍の場を広げ維持していくためには、自分自身をブランディングを行う。作ること、発信すること、それぞれを意識して活動する。

03.海外展開

2023年から海外での発表の場が少しずつ増えてきたが、各展示の客足を伸ばす為には、その国々へのアプローチ方法を調査し、より自身の世界観が伝わるように工夫する。

制作・研究活動

活動スケジュール

2024年

12月「つなぐ展」グループ展/台北(外琨塔 vaikuntha 藝術中心)

2025年

3月「Sakura展」グループ展/フランス (Gallery Jo Yana)

4月「tagboat art fair 2025」ART FAIR /東京

5月「2025 WHATZ ART FAIR 台北」ART FAIR /台湾

6月「CLOUDS ART GROUP SHOW」グループ展/東京 (CLOUDS)

11月「Real展」個展/東京 (tagboat)

研究奨励賞受賞以降、国内外のグループ展に 3 箇所、アートフェアに 2 箇所に参加。個展を東京で開催した。2023 年、2024 年とアートの世界市場が縮小傾向にあることから、その状況下で、作品に注目してもらう施策が個人アーティストにも必要に感じた。作品の発表と同時に、「アートに興味を持ってもらうためには何をすべきか」を考え、実行していく 1 年となった。次項からは、特に出展した作品数の多かった 2024 年 12 月「つなぐ展 / 台北」、2025 年 4 月「tagboat art fair 2025」、2025 年「Real 展」個展の様子をピックアップしてレポート。

「つなぐ展」グループ展 / 台北

参加作家：有村佳奈、高菜汁粉、chikako adachi、井口エリー

期間：2024年12月7日(土) ～ 12月22日(土)

会場：外琨塔 Vaikuntha 藝術中心

住所：台北市信義區仁愛路四段512巷16-1號1樓, Taipei, Taiwan

CONCEPT

台湾で開催する展示として過去最多の作品数12点を展示。日本の季節を感じる風景やお花を題材にした。また本展覧会を企画・運営されているウン・インペン氏のコレクションも同時に発表。ギャラリーでは、台北のコレクターやファンの方と交流するためのお茶会とサイン会も実施。台北で好まれている作風やトレンドを直接聞く貴重な機会となった。

IMAGES



「tagboat art fair 2025」art fair/東京

期間：2025年4月18日(金) ～ 4月20日(日)

会場：東京都立産業貿易センター浜松町館 展示場2階

住所：台北市信義區仁愛路四段512巷16-1號1樓, Taipei, Taiwan

CONCEPT

アートフェアへの参加意図および制作背景について

近年、海外メディアを中心に、2024年以降のアート市場が縮小傾向にあるという報告が多く見られる。一方で、日本国内では市場規模が比較的小さいことから、依然として上向きであるとの見方も存在する。しかし現在は、アートに限らず多様な娯楽やコンテンツが溢れる時代であり、表現の分野における競争は年々激しさを増している。こうした状況を、作家として無関係なものとして捉えることはできず、今できる範囲で真摯に向き合う必要があると感じている。

その中で重要だと考えたのは、市場を活性化させる以前に、「アートが好きの人」を増やすことである。関心や共感を持つ人が増えることが、結果として市場や文化の広がりにつながるのではないかという思いに至った。

この考えに至るきっかけとして、少数の上映館から口コミによって広がり、大ヒットとなった映画作品の存在がある。それらの作品には、完成度の高さだけでなく、作り手の強い「好き」や情熱が感じられ、その想いが観客一人一人に伝播していったように思われた。この現象から、自身もまずは「自分の好き」を率直に表現し、それを広げていくことが大切だと考えるようになった。

そのため今回のアートフェア参加にあたっては、テーマを先行させるのではなく、「好きなものを描く」という姿勢を制作の軸に据えた。

発表作品について

制作においては、「光と影」のコントラストを明確にした作品に取り組んだ。構成をシンプルにすることで、特に「影」の色彩やニュアンスが画面全体の印象を左右する要素となり、何度も試行錯誤を重ねながら制作を進めた。その過程で、影が持つ奥行きや美しさに改めて気づくこととなった。

さらに、影を描く行為を通して、人の内面に潜む静かな感情や、表に出にくい側面にも関心が向かい、それを別の形で表現したいと考えるようになった。そうして制作したのが、Navyを基調とした色調の作品である。本作には、音楽における「A面・B面」という考え方を重ね合わせ、主流ではないが確かな魅力を持つ側面を表現する意図を込め、「Reverse」というタイトルを付した。

本制作では、自身の「好き」を追求することを通して、影の表現や人の内面が持つ魅力について改めて向き合う機会となった。作品の受け取り方は鑑賞者それぞれに委ねられるものであり、本作を通じて何かを感じ取ってもらえたら幸いである。

The exhibition



個展「Real」/東京

期間：2025年10月31日(金) ～ 11月18日(火)

会場：外珉塔 Vaikuntha 藝術中心

会場：tagboat

住所：〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町7-1 ザ・パークレックス人形町 1F

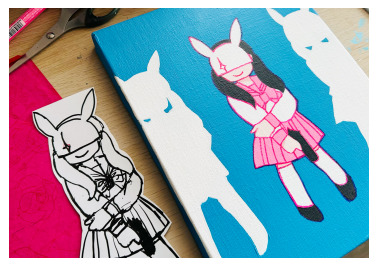
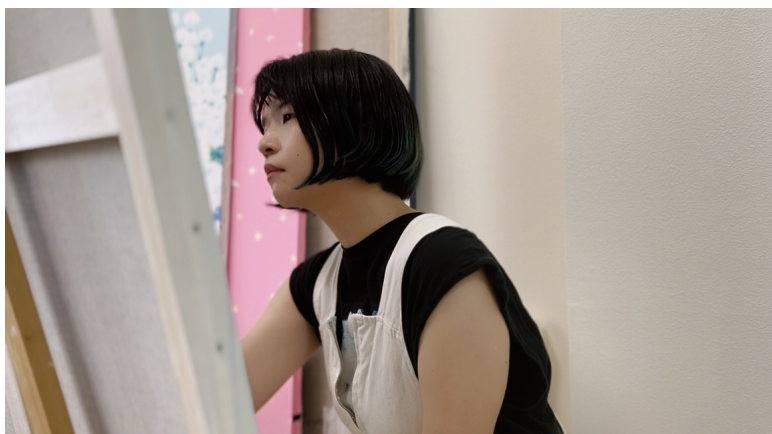
CONCEPT

個展「Real」に込めた意図と作品コンセプトについて

本個展のタイトルを「Real」とした背景には、SNS上で目にした、企業による生成AIイラスト使用を巡る炎上がある。その際に多く見られた批判の中で、特に印象に残ったのは「手の描写が不自然だ。人間の絵師ならこうは描かない」という意見であった。この言葉から、人々が“本物かどうか”を判断する基準を、絵の完成度や不完全さに置いていることを強く感じた。しかし同時に、その「完璧さ」こそが、いずれAIが最も得意とする領域になるのではないかという危機感も抱いた。実際、炎上から数か月後には生成精度の高い新モデルが登場し、AIの不自然さで真偽を見分けることは難しくなりつつある。

こうした状況の中で、完璧さを追求することへの違和感とともに、「本物らしさ」や「リアル」とは何かという問いが生まれた。制作において常に「完成度の高さ」を求めてきた自身の姿勢が、知らず知らずのうちにAI的な再現性へ近づいているように感じたことも、その問いを強める要因となった。そこで一度立ち止まり、自分にとっての「リアル」を見つめ直すことを、今回の個展の出発点とした。

制作風景



The exhibition

作品について

作品《僕らのリアル》シリーズでは、近年の加工アプリ、とりわけ「AI Flower effect」に象徴される、現実を瞬時に美しく変換する技術から着想を得ている。コロナ禍の2020年に、閉塞感の中で時間をかけて制作した自身のシリーズ作品と、数秒で完成するAI表現を重ね合わせ、「美しく見せたい」という根源的な欲求は共通している一方で、その“手軽さ”に対する違和感や葛藤を抱いた。そこで本作では、あえて絵画の連作という手法を選び、渋谷に佇む乙女の背景が花へと変化していく時間の流れを、一枚一枚描き重ねることで表現した。加速する現代社会に対し、「時間をかけること」の意味を問い直す試みである。



↑《僕らのリアル》をテーマにした作品群

《パラレル私》では、現代人が抱える複数のアイデンティティをテーマとしている。SNSを通じて、目的や場面ごとに異なる「私」を生きる感覚は、決して特別なものではない。

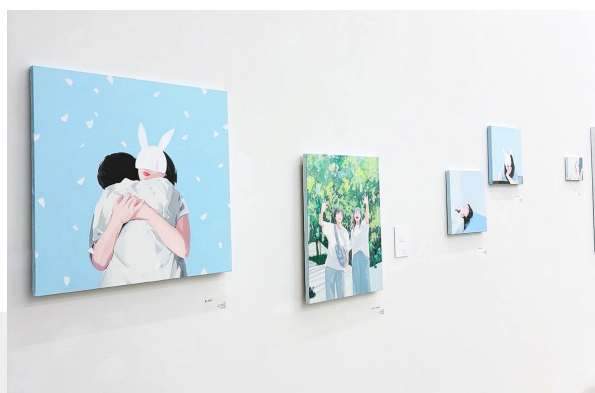
本作では、異なるタッチで描かれた複数の乙女を一つの画面に共存させ、過去の自分が消えるのではなく、層のように内側に積み重なっていく感覚を可視化した。テキスト中心のSNSが広げる年齢や立場の曖昧さが、私たちの心に与える影響を問いかけている。



「パラレル私」 canvas・acrylic paint・size:116.7x 80.3 cm 2025年

さらに《大切にしたい今》では、フェイクとリアルの境界が曖昧になる時代において、目の前の人と向き合い、「今この瞬間」を感じ取るこそが、自身にとっての最も確かなリアルであるという思いを描いた。

《大切にしたい今》をテーマにした作品群→



個展開催時イベント実施に関する活動報告

実施したイベント

- 01 | ガイドツアー
- 02 | サイン会
- 03 | ライブペインティング

昨年より、個展開催時の土曜日には必ずイベントを実施する取り組みを続けている。これは、来場者との交流の場を設けるとともに、作品鑑賞にとどまらない「お祭り」のような体験型の個展を目指しているためである。一方で、イベントを企画するたびに集客への不安は大きく、開催前日は「一人でも来てほしい」という思いで迎えるのが正直なところである。実際に参加者が足を運んでくれた際には、強い感謝の気持ちを抱くと同時に、継続の意義を改めて実感している。

本個展では、以下の4つのイベントを実施した。

まず1つ目は、作家本人によるガイドツアーである。作品解説を通して制作意図や背景を直接伝えることを目的とした企画であり、「言葉で伝えることが苦手だからこそ絵を描いてきた」という自身の意識を踏まえつつも、「伝えようとする姿勢」そのものが大切だと考え実施した。

ツアーでは、個展タイトル「Real」の着想源となった生成AIイラストを巡る炎上事例を実際に紹介しながら解説を行った。SNS上では誤解や切り取りのリスクが伴う話題であっても、リアルな場では安心して共有できる点が印象的であった。また、自身にとっては「周知の出来事」だと思っていた話題が、参加者にとっては初耳である場合も多く、「当たり前」は人によって異なることを実感する機会となった。約30分間のツアーでは、参加者の温かい雰囲気を支えられ、落ち着いて解説を行うことができた。

2つ目は、サイン会である。今回の個展に合わせて制作した作品集「Real」を購入した来場者に対し、ドローイング付きサイン入りポストカードをプレゼントした。人前でドローイングを行うことは集中力を要するが、継続的な経験を通して表現の安定感が増したことを実感できた。何より、来場者が喜んでくれたことが大きな励みとなった。自費出版で制作した作品集を購入し、イベントにも参加してくれる来場者の存在に、改めて感謝の気持ちを抱いた。なお、サイン会中に自身の娘が列に並ぶという微笑ましいハプニングもあり、会場の和やかな雰囲気を象徴する出来事となった。

3つ目は、ライブペインティングである。今回は、制作の過程と完成の変化がより明確に伝わるよう、下絵のみを準備し、会場で仕上げる形式を採用した。薄塗りを重ねる技法を選んだことで、時間内にスムーズな制作が可能となり、初めてライブペインティング中に一作品を完成させることができた。完成時には大きな達成感を得ることができ、個展作品《パラレル私》に通じる少女的なタッチの新たな表現にも手応えを感じた。



「Real展」特別対談トークショー開催報告
— モモコグミカンパニー氏との対話を通して —



04 | 対談トークショー

4つ目は、モモコグミカンパニー氏との対談トークショーである。

2022年に同氏の小説『御伽の国のみくる』の装画を担当して以来、創作姿勢や言葉への向き合い方に共感を抱いており、今回「言葉」と「リアル」をテーマに対話する機会が実現したことは、個展の趣旨とも深く重なるものとなった。

トーク前半では、モモコ氏の展覧会「言葉をひろう」を振り返り、鑑賞者が言葉を選び持ち帰る参加型インスタレーションについて語り合った。「ただ観る」ことへの心理的負担を軽減し、鑑賞者が展示に関わる仕組みは、作家と観客をつなぐ新たな鑑賞体験として印象的であった。私自身も国際芸術祭での事例を交えながら、「伝えたい想いに最適な表現手法を選ぶ」という共通した創作姿勢について話を広げた。

続いて、「今の自分を形づくっているもの」をテーマに、モモコ氏が影響を受けた音楽や表現について共有した。BiSH時代に触れたビジュアル系音楽から、「イメージを構築し演じることで表現する姿勢」に共鳴したという話は、私の作品における人物表現や“仮面”の概念とも重なり、強い共感を覚えた。

また、大学卒業論文のテーマである「アイドルと演じること」についても触れ、社会学者アーヴィン・ゴフマンの理論をもとに、役割や期待の中で自己を演じるという視点が、現代社会やSNS時代の自己表現と密接に関わっていることが示された。

後半には、展示作品の前での解説と撮影OKタイムを実施した。代表作《僕らのリアル》や、モモコ氏をモデルにした作品について、言葉とイメージの関係性を説明し、来場者にとって記憶に残る時間となった。終盤には、詩集『氷の溶ける音』から着想を得た作品をサプライズで贈呈し、温かな雰囲気の中でトークショーを締めくくった。

本企画は、「Real展」のテーマを多角的に体験してもらう機会となり、アートと言葉の距離を縮める有意義な対話の場となった。

総括・今後の展望

現代社会は、かつてない速度で変化を続けており、その流れを的確に観察しながら活動を維持・発展させていくことが、アーティストにも強く求められている。

現在のプロのアーティストに必要とされるのは、作品そのものの探求にとどまらず、SNS運用、マーケティング、自己プロデュース、映像制作など、極めて多面的な能力である。国内外で活動の場を広げるためには、これらを制作と並行して行う必要があり、表現とは異なるスキルを常に要求される状況にある。そのため、自身の適性や限界を見誤ると、心身に大きな負荷がかかる危険性も否定できない。自己の探求と、社会にアートを届ける行為とのバランスを意識した活動が、今後ますます重要になると考えている。

ユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』の中で、文化を「精神的感染症あるいは寄生体」に喩えている。現代においてSNSは、まさにその言葉を体現する存在であり、私たちの思考や行動に深く入り込み、無意識のうちに依存を生み出している。

さらに現在は、そこにAIという新たな“寄生体”が加わり、情報や表現の生成スピードは飛躍的に加速している。この急激な変化に、心が追いつかない人が増えていることも、実感として感じられる。

こうした時代背景の中で、私は「アートは処方箋になり得るのではないか」と考えるようになった。即時的な理解や効率が重視される社会において、あえて“わかりにくい”存在であるアートは、思考を緩め、立ち止まるための余白を与えてくれる。すぐに答えを求められる現代だからこそ、アートが持つ「考え続ける時間」や「感じる余地」は、社会にとって必要な機能であると感じている。

一方で、アート業界が鑑賞者に対して「わかりやすく伝える努力」を十分に行ってきたかという点、課題も多いと感じている。作品に難解さがあること自体は問題ではないが、その世界へ入るための道筋、いわばガイドラインを提示することは、今後ますます重要になるだろう。その反省も踏まえ、YouTubeチャンネルを開設し、制作過程や思考の流れを可視化する取り組みを始めた。また、展示と併せて小説・エッセイ・詩を収録した書籍を制作し、絵画に限らず言葉によって自身の「リアル」を伝える試みも行っていきたい。

表現の手段を広げることは、アートへの入口を増やすことにつながると考えている。課題が見えるたびに新たな挑戦は増えていくが、その積み重ねこそが創作の醍醐味である。今後も一つひとつの試みを丁寧に重ねながら、アートと社会をつなぐ表現を継続していきたい。

有村佳奈